



TITLE:

北樺太[採]集[記](下の四)完

AUTHOR(S):

玉貫, 光一

---

CITATION:

玉貫, 光一. 北樺太[採]集[記](下の四)完. 地球 1927, 8(1): 55-62

ISSUE DATE:

1927-07-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/183293>

RIGHT:

するに至つたものである。而して此の如き性質の岩石を生ずるに必要な條件の考察に對しては均一平衡が外界の要固に

依つて支配さるゝ状態が判明するに至つて始めて解決し得るものである。

## 北樺太採集記

(下の四) 完

### 歸 途

玉 貫 光 一

八月十七日。中隊長を始め多くの軍隊の人々の見送りを受けてアダツイム迄五日間の溯航の途に就いた。午後四時未だ陽は高かつたが河中のテルタえキャンプする。普通ツイミの旅行者は溯航する時には中間の驛舎へ苦心して宿泊する煩を避けて携帶天幕を持參しては之等のテルタを利用して宿泊するのである。河岸の枯草を充分に敷いてその上に軍隊から渡された厚い毛布を敷いて休むのであるが、寒地特有の厚い冷やかな地霧が河一帯に包む眞夜中の寒さは名狀すべき何物もない、私達は連も眠れさうもないので天幕を抜けて枯木に火を點じて暖をとつた。中天には文字通りの刃の様な弓張月が冷たい光を投げてゐる。ところと燃へる滑火を取り巻く四五人が輪をなして青白い。而も無限の人無き曠野を流るる川の中洲に蹲まつてゐる光景は、遠い遠い原始時代の寒冷と飢とに戰つた我々人類の生活を忍ばしむる。我等の驛舎から少しく離れた所には舟を漕いでくれた露西亞の農夫達が、盛んに火を焚き強烈なアルコールに蕩酔して高らかに民謡を

歌ひ乍ら夜明けを待つてゐる。私達は直きに彼等と仲良しになり、ウキスキを飲み、チヨコレートを嘖り乍ら、簡単なロシア農民の裡謡を教はつては高々と歌つた。

彼等は勢々二人位より入られない天幕を焚火の側に張り、代る代りに寢に就くのであるが、ヤリヤーク達は内地ならば十一月頃の様なこの夜寒に一枚の毛布位を身に附けた位で平氣で夜を過すのである。滑火を圍んで高唱談話し乍ら月明の氣分に浸る文盲のロシア農民達は、土人達と略々同じ様な境遇にあり乍らもやはり文化人なのである。

晝間はあれ程に苦になつたヤアカは夜になると一匹も出て來ないのも寒地を思はせる。十八日未明に起きて驛舎を疊み再び舟の人となる。晝食をなすべく、バルカタ、ブープニ間の河岸に上陸した所が偶然にもバルカタ、ツングースの酋長ウイノクロフの夫人と娘とを中心にした彼等の一隊が先着して休憩してゐるのに會した。夫人は四十才位の人で灰色の衣服を纏ひ、娘は唐人お下げの様な髪をした十七、八歳の氣品の

ある美人である。聞けば彼等は一隊を率いてアダツイムへ日用品の購入に出ての歸りなさうで小麥や砂糖や菓子と云ふ様な日用品が側に繋がれた馴鹿に積まれてあつた。晝餉を了へて出発して約一時間程した頃、私達は河岸を進み來て勇ましく馴鹿を流れに入れる二十人程の勇敢なツングース達に出會つた。見てみると馴鹿は上手に殿めしい角を有した頭部を水面に上げて廣い河を苦もなく乗り切つてしまつた。見る間に此の曠野の淋しい勇士ツングースは河岸から消えて行つた。

この夜も亦寒さの爲めに眠むられないので未だ充分に明け切らぬ内に出發した。十九日は終日微雨に悩まされ乍らブーゾニの驛舎に泊り、二十日はアダツイムから五、六里下流の露人の家に泊り、二十一日の日没頃漸く五日間の苦闘を終へてアダツイムに着く事が出来た。

アダツイムでは兵舎の裏の牧柵を圍らした放牧地で色々の甲蟲や半翅類を採集した。もう色づいた叢には秋の蟲が淋しく鳴いてゐた。此の肥えた牧場の採集地からは美麗な新種の金花蟲カラフトサルハムシ *Chrysocephalus Karatons* *Tama*. を得た。之れは猿の様にまるまつた様子をした黒い奴で、周圍と翅鞘の中央とに黄い條をもつた虫である。

又鳴く虫では西歐に多い、ハネナガホシキリギリス (新種) *Decious vericorus L.* をつかまつた。之は普通のホシキリギリスに似てゐるが翅には胡麻の様な黒い斑紋が著しく散布して、翅が非常に長く鳴き聲も何となく大きい様な氣がした。夜間採集は青森公園と稱する兵舎の前の小高い丘で行つたが

無数にグロウサギカウモリ *Plecotus auritus auritus L.* が頭上を飛來する。採集用のネットを振つて捕へようとするが仲々に敏捷で採れなつたが、苦心の末二匹を捕獲する事が出来た。之はその名前の示してゐる様に非常に耳が長いコホモリで北歐地方に多い種類であるが未だ樺太以外の本邦の何れの地方からも採集せられないものである。

二十三日の八時頃村の農夫の馬車を仕立てて一路テルピンスコエへ走つた。所々に散在した村落は收穫に賑つてゐた。麥も燕麥も全く穂を垂れて畑には雀が盛んに飛び立つてゐる。白樺は早少しづつ色づき薄雲の流れも全くの秋を思はせる。

ぼつぼつ溯つて來たのだらう。或る村落の秋陽のさしくる軒先には大きな鮭が四五匹吊されてあつた。秋が忍びやかに來てゐるのだ。夕方にテルピンスコエに入り、休む間もなく次の日の朝には露を踏んで郊外の停車場に至り、亞港へ向ふ汽車に乗つた。

此の汽車はア港、テルピンスコエ間四十四哩の鐵道を走り大正九年の皇軍の保證占領の時に三百萬圓からの大金を投じて、中部山脈を横斷せしめて建設せられたものである。建設して間もないのと山嶽を切り鑿き冒險的に敷設せられたものであるから常に脱線して、特に峠下、露の谷兩驛間の所謂カメンシエノエ峠は最も危險區域で、三、四十間もある峡谷を渡した鐵橋が、三つ四つもあるのである。併し危險とは言ひ乍ら、敷設以來一度も慘事の起つた事もなく、之の爲めに日本人の漁夫や鐵夫を始めこの間の露西亞人や支那人達が無償

に乘車出来るので何程助かつてあるか側り知れないのである  
朝霧の未だ乾き切れない野原を汽車はひた向きに走る。上アルムダンの附近迄の平野は一面に焼野原でヤナギランの紫や純白のヤマハハコグサ、ハンゴンサウの鬱金色さてはススヤドモエ、等とまこと自然の百花園の景を呈してゐる。午後陽は未だ高かつたが上アルムダンの小村に汽車を乗り棄てて宿舎に入り、入浴等して一同は寢に入つた。

次の日再び汽車の人となり、愈々高地横斷をなした。汽車が段々と高地に入るに従つてトドマツやハンノキ類の偉大なものが事々と天空にそそり立ちその下草には一丈位もある蕨が茂つてゐる。パツと陽の射す樹林の小隙には無數の昆蟲が戯れて幾度か私の胸を驚かす。稀らしい事に此のカメンシエノエ峠の頂から少し下つた森中に極めて小區分ではあつたがクマザサの姿を見る事が出来た。思ふに私達は小區分ではあつたがツイミ河流域や東海岸の山脈等の深い山林を跋涉したのであるが遂に此の植物の存在を見る事が出来なかつたのであるが、此の峠の邊を堺として此の南國性の植物は全く入る事が出来ないのではなからうか。

路の多い、その名も露の谷と呼ばれる停車場で下車して南下二里程の第二アルコウ迄の下り阪を採集し乍ら歩いたのであるが、汽車の線路に添ふて下つたならばよかつたのであらうが、しきりなしに熊が出没すると云ふので丈餘のイタドリを生ひ被さる人道を歩いたので採集は不成功に終つたが、心ゆくばかりこの優れた北地の山嶽の景を眺める事が出来た。峠

から流れ出する溪流には無數のヤマベが棲息して所々に駐在してゐる隊の人々のこよなき嗜好物となつてゐる。私達も亦第二アルコウの軍隊の人々からこの潑刺たる川魚の手料理で盡餉を了へ再び汽車の人となつてア港へ向ふ。第二、第三のアルコウは清流を控へた淋しい、そして上品な部落である。汽車はボロウキンカの炭坑へ着く。此の炭坑は見た所全くの露頭で、多くの邦人坑夫が専心に働いてゐる。海岸に出れば黒帯の立派な露頭が見えて來た。海岸線はゆるやかとは云ひ乍ら一種の斷崖をなし急に海中に入つてゐるので、汽車は丘の上を廻り乍ら走つて行く。

午後四時遂に私達一同の調査隊は三十九日目でアレキサントルフスクの土を踏む事が出来たのである。

### 北樺太の動物地理學

私は約四十日程の期間に北樺太の北緯五十度から五十二度の間を視察して、不充分ではあつたが此の地方の昆蟲を主として凡ゆる生物の生活状態と其の分布状態との大體を知ることが出来た。今私の調査した範圍内と同行した多くの諸先輩の報告と其他の此地に關係した自然科學の調査書との力を借りて北樺太の動物地理と生態學との輪郭を畫いて見よう。如斯大きな問題は唯一、二面の調査の結果のみで推斷する事は無謀の事に相違ないが、他日完全な研究が積まれ記述者の論議が修正せられる事を豫記し乍ら、先人未踏の自然界を踏査した者の責任の一部として之を敢て爲し、此の一文を終ら

しめる者である。普通動物地理學上に於て地球上の分布區を分け舊北洲（歐洲全部地中海に面する亞弗利加沿岸、シベリヤ、支那北部、日本の大部等）、亞弗利加洲（亞弗利加の大部マダガスカル島）、東洋洲（東印度、南方支那、ビルマ、暹羅馬來半島、ボルネオ、フィリッピン、臺灣、琉球、小笠原島等）、オーストリヤ洲（濠洲、ニュージラランド、南洋諸島等）、新熱帶洲（南米西印度、中央亞米利加）、新北洲（北米メキシコ、アラスカ）の六區に分けられてゐる。而して樺太は勿論舊北洲に屬し、更に此の舊北洲（Palaeartic region）をオーレス氏の其れに従つて、ヨーロッパ亞區、地中海亞區、西伯利亞區、滿洲亞區の四範圍に分かつて、之を大體西伯利亞區に屬せしむる妥當とする様な定論になりつつある。而して日本の領土に於て西伯利亞區に屬せしめ得る地方は全く此の樺太のみであつて、他の舊北區に屬する何れの地方も悉く滿洲區に屬してゐるのである。然らば此の重大なる亞區を區別する境界線は何れの地方に劃せらるべきやに就ては目下の日本の動物學者間に最も注目されてゐる問題であつて、北海道と本州との境界をなす津輕海峡となすべきか又は樺太、北海道間の宗谷海峡となすべきかは判然と決定してゐないのである。之れより先、英人ブラキストン Blakiston 氏は一八八三年（明治十六年）に雜誌 Trans. Asiatic Soc. Jap., Vol. 11, no. 1, p. 126 に於て日本島と大陸との古代に於ける接續に關する動物學的指示に就て（Zoological Indication of Ancient Connection of the Japan Islands with the

Continent.）と言ふ題目の下に其の採集に關する多數の鳥類と哺乳類とに依つて北海道と本州との比較研究が積まれ、日本列島は古代に於て全く對岸の亞細亞大陸と連續して居つたものであるが、先づ本州が離れ、後に至つて北海道が分離したものである。其の事實は兩地に生活する動物相の相違からして證明する事が出来ると云ふ様な事を記せられたそれ以來此の兩地の境界をなす津輕海峡は「ブラキストン線」Blakiston's line と稱せられ、南進せる動物は津輕海峡に依つて、遮斷せられ従つて津輕海峡を以て西伯利亞區と、滿洲亞區との分割點となされたのである。然るに近代日本に於ける動物學の長足の發達は此の准決定的なる分布線の生命の價値に餘程の變を與へたのである。

即ち松村松年、八田三郎、松本彦七郎の三博士を始め多數の學徒樺太、北海道及び本州の動物相の比較研究の結果、シベリヤ、アムール地方の動物の著しく樺太に分布して、宗谷海峡には渡り得ない種類が、本州から北海道へ渡り得ない種類と同程度に産してゐる事實が判明したので、此の宗谷海峡にも亦、ブラキストン線と同程度の一線を劃し得る事が認知せられ、假に此の線をブラキストン線に因んで最古の研究者たる八田理學博士の名稱其の儘に八田線（Hata's line）とも名付けべき境界線を設立し、津輕海峡は滿洲亞區の極限線となり、宗谷海峡は西伯利亞區の極限線となるらしき事が知られて來た。

然らば此の二地方の中間に位する北海道は如何と云ふと、兩

地方の動物の進入してゐる率が略々相半ばしてゐる所から之は Blakiston 氏が裏書きした様な純然たる分布境界をなすものではなく、兩地相の接觸帶に屬するものとなすのが最も適當なる説となされるのではないかと思はれる。此の事實は昨年恩師松村理學博士を始め北海道帝國大學昆蟲學教室の人々の北海道の最高地たる大雪山の貴重な採集品の發表に依つて更に歴然とせられた事と思はれる。即ちウスバキテフ *Parnassius eversmanni daiseisuzana Mats* の原種は中央西伯利に産するもので、未だ樺太からは發見せられないものであるが、對岸西伯利に多數に産する以上は他日發見せらるべき可能性の過分にあるものであるし、又樺太に産するクモマベニヒカゲ(亞種)とカラフトルリシジミ(亞種)の樺太に産する二種類が生活してゐる事が知れたのである。

又甲蟲にあつては本邦に於ては樺太のみに産すると思はれてゐたキタアラメゴミ(新稱) *Hyperophus cancellatus Motsch* アアラコネメツキ *Corymbitus rugosus Germ* 等が採集せられてゐるのである。更に歐羅巴西伯利兩區に分布してゐる。

ホトリ *Arctia Quensellii Payk* が始めて大雪山に於て採集せられた。之も亦恐らく樺太に於ても採集せらるべきものであらうが、本州に於ては恐くは採集せられないものであらうし此の二亞區の區劃線上に重大なる役割を演ずるものであらうと思ふ。如斯北海道の兩地方との接觸地なる事は稍々決定的になりつつあるのであつて、宗谷海峡の重要視せられる事に

依つて津輕海峡の價值が從來よりも輕視せられる事には決してならないが、此の二つの海峡の動物地理學的の價值は同一視せらるべきものであらう。

樺太の動物地理は如何にと云ふに先づ哺乳動物から云へば、宗谷海峡を渡れぬものが、カラフトアナグマ *Meles taxus Bodd* オホヤハネ *Gulo gulo L.* シヤカウシカ、トナカイの五種類があり、更に爬蟲類や兩棲類にあつてはカラフトカナヘビ、カラフトマムシ、カラフトヒキ、カラフトサンセウチ *Salamandrella Keyserlingii Dyb.* の五種類を産して居り、其の多くは西伯利地方に生棲してゐるものである。更に魚類にあつてはバイカル湖以西の緯度線に沿ふて廣く西伯利に産するバイク *Lucius reichertii Dybow*

第 一 圖



カラカネビクガ  
オサシムシの圖

を産し、昆蟲類にあつては、日本特産たるマイマイカブリ屬 *Damaster* 北海道に産するに反して樺太には全く産せず、其代りに此の地獨特のカラカネクビナカオサムシ(新稱) *Acoptorhynchus Lopatini Mor.* を初めとして沿岸ニコラエスグ地

方に産するアラメハナカミギリ *Sachalinobia Koltzei Heyden* カラフトアリモドキ *Tricholus irkutensis Lax.* カラフトチントウ *Anatis ocellata L.* カラフトベニセラダムシ *Cucujus Haematodes Ersch.* カラフトオホザウムシ *Hyl. obius albosparus Bohem.* 等の甲蟲類脈翅系の昆蟲にあつてはキモンラグダムシ *Raphidia xanthostigma Schum.* やワスモンゴマフトビケラ *Neuronina atrata Gm.* 等が産し更に鱗翅類ではカラフトヘウモンモドキ *Melitaea naturna L.* ハマベシジミ *Lycocena astrarche Bgstr.* カラフトトルシジミ、カラフトタカネヒカゲ、ツマジロウラナミシヤノメ、ヒメヘウモン、ナカギンヘウモン等々の蝶類を初め更に蛾にあ

第二圖



アラメハナカミギリ

つてはクロスキバホウシヤク *Haemorrhagia fusciformis L.* カバモンドクガ *Orygia antiqua L.* ホシキイロホソバ *Philea irrorella Cl.* イッホシキンウハバ *Syngrapha dives Er.* ナサエキンウハバ *Phytometra nadeja Obri.* 等其他膜翅類、脈翅類、半翅類、直翅類等の各目に亘つて樺太特産又はシベ

第三圖

三圖



パイヤのグ

リヤ系統の種類が多数に入つてゐるのである。更に他の諸動物にあつても亦故郷を西伯利として樺太に迄進入してゐる種類は随分にある事であらうと思はれる、如斯列記して見たる結果、樺太の西伯利亞區に列せしめる事は最早疑の無い事實であるが、政治上區分せられた北緯五十度を以て南北に分たれたる樺太自體の動物地理學は如何であらうか  
北樺太には大體三つの山脈が縱走してゐる即ちシニミツド半島から走り北緯五十一度程の地點に達してゐる北部中央山脈と、更にその南方のホコヒ岬附近から發して海岸に沿つて南樺太の南端に迄達してゐる中央山脈と一つは東海岸のナビリスキー灣の南部から發して北知床半島に終つてゐる山脈とである。而して之の三つの山脈

の内でも最も發達の著しいのは南部中央山脈で之は國境附近の所謂松阪峠で東に岐れて、ツイミ河と幌内河の分水嶺となり東部の海岸山脈と連續してゐる。此の分岐を終つた山脈は山勢著しく發達して南樺太に至つては全島隨一の大山脈となつてゐる。若しも日本内地の動植物の分布の概念を以て推すならば南北樺太の分布上の分岐點は西海岸にあつては五十二度内外の所に發してゐる中央山脈と、東海岸にあつてはその山脈の始點である五十一度四〇分程の所からと云ふ様に歴然と劃し得る様に思はれるのであるが、事實に於ては、樺太の様な寒地に於ける山嶽は内地のその様に其の植物帶が垂直的に幾段にも區分せられる様な事はなく、其處に生育する植物の平地のそれとは差程の相違が認められないのである。従つてこの植物分布と密接な關係に立つ動物にあつても之等の山脈は差程の重要な意義を有しない。

植物學に於ては往年此の地の植物を調査されたシュミット氏は東海岸に於ては多來加灣より、西にあつてはドゥエ附近の中央山脈の始發點から以南を第一區となし、之れ以北の地方を第二區となして、第一區の特に西海岸に面せる地方は海流の關係其他の物理的關係に依つて、日本北部地方の其れと相似の分布相を示し、第二區はオホーツク沿岸地方の其れに亦相當の共通種の存するを認め得られる事を述べてゐる。而して第一區には中世樹林帶や原野植物帶が良く發達し、第二區にあつては概ね泥炭地植物帶が發達する事になる。北樺太に於いてはイルコフ附近を中心とする三山脈の始發又は最終點

に當る中間の大平野にあつては其の特長である繖形科等の本草が繁茂して、従つて之を食する特殊の鳥類や昆蟲にあつてはテフセンルリシジミ其他多くのヘウモンテフの類が生活し東西の山脈にあつてはアカグマ、ヤマネコ等の哺乳動物等が産し且つ又グマザサ等の分布が僅かではあるが見られる。ツイミ川の下流以北から幌内兩河の下流に發達したボットブール地帯には又馴鹿を始め、カラフトルリシジミ其他の泥炭地に限つて生活する諸動物が分布してゐるのである。更に又北進して北中央山脈に至るならば私達は残念乍ら探險する事が出来なかつたが、後年其の地を跋渉せられた工藤理學博士の御話に依れば同じボットブール地帯であり乍らもシュミット半島の植物相は馥香地方のそれやヌイオ地方の其れ等とは更に變化した景観を呈してゐるさうであるから、此所に構成せられた山脈は必ずしも南方のそれとは同一ではなく、従つて動物の種類も亦幾分か變化せるものが生活してゐる事は想像の出来る事である。

以上は大體に亘つて北樺太一帯の動物の生態と其の分布區とを記した事になるのであるが、要約すれば、樺太に於ける動物の公布狀態は政治的に成されたその如くに北緯五〇度を以て分岐せられ得るものでなく、南北の境界線を強ひて求めるならば五十一度を少しく超へて南方に向つて聳走せる東部山脈の始發點とドゥエ附近に至つて漸く山勢の加はる中央山脈とを境となして南北に分ける事が出来得るものであらうか。而して尙も之を生態學的に區域をなすならば幌内流域に



發達したるもの、マイオ川下流より北部中央山脈を除き？シ  
ユミツトハ島に迄發達せるポットゾール地帯の一區と、廣く  
南樺太に至つてゐる東西の兩山脈の中世樹林帶の一區と、然  
してツイミ、幌内兩川の上流に存する廣きルイコフ附近の平  
野帶の一區と北部中央山脈の一帶區との三に區別する事が出  
來得る。而して又、東海岸と西海岸と北海岸とでは東北兩海  
岸にあつてはオホーツク寒流の其れに依つて、西海岸にあつ  
てはアムール沿海の兩地方との接續等に依つて幾分かの相違  
點があるらしい事が認められる。

樺太全帶として見るならば西伯利亞區に編入する事は當然で  
あるが、尙ほ更に一層嚴密に西伯利亞區の下にアムール、オ  
ホツク系とも稱すべき區線の成立を許され得るならば樺太は  
明らかに其の部分に入れ得べきものである。

本文を爲すに當つては多數の文獻を用ひた。今其の主なるも  
のを列記してそれらの著述者に對し深謝の意を表する次第で  
ある。

北樺太の民族に關して——鳥居龍藏博士、有史以前の日本及  
び人類學及び人類學上より見たる北東亞細亞 其他の著作。  
西村眞次氏、大和時代其他の著作。

動植物學に關して——松村松年博士、樺太に關する昆蟲相に  
就ての第一貢獻。樺太產鱗翅目に關する研究（以上外國文）  
岸田久吉氏、哺乳動物圖解。其他の研究。工藤祐舜博士、北  
樺太植物調査報告。大阪毎日新聞社編纂、北樺太。滿鐵調査  
課編、亞細亞露西亞の住民。其他の調査資料。

一般に關して——大田篁吉氏、サカレン案内。

以上の外に、動物學雜誌、地學雜誌、札幌博物學會報、其の  
他の諸研究雜誌に發表せられた八田三郎博士の北海道及び樺  
太に關する動物分布に關する部分を始めとして、多くの先進  
學者の發見を引用した。

又北樺太探險中の日記や土人の土俗品等の使用を心良く許さ  
れ且つ多大の助言を致された友人河野廣道君に感謝する次第  
である。（完）